

上海の墓

The Form of Graveyards in Shanghai

何彬

HE Bin

要 旨

中国において首都北京に次ぐ大都市の上海市では、伝統的な土葬という埋葬の慣習から火葬法の遺体処理法へ、そして遺骨を収納する方法までの死後慣習をめぐるこの数十年の変化はすさまじいものである。筆者は、上海市における遺体の収納法・葬法の変化による墓・墓地の変遷を対象に、2005年以来調査を行った。「東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史」研究班のメンバーとして、2010年3月、2011年3月と2011年11月に三回にわたって、葬儀場や霊園を数多く調査した。

本文では、上海市の公墓の歴史的変遷と現状を記述した上、葬法による分類、立地点による分類、集まり方と特殊なメンバーで構成する墓地の分類と経済の角度からの分類を基準に、現代都市上海の墓の種類をA～Eに分類した。さらにAに2タイプ、Bに3タイプ、Cに3タイプ、Dに2タイプ、およびEに2タイプのように、さらに細かく分類して記述した。

本稿では、上海の墓地をめぐる調査を通して得られた資料を整理した結果として、初歩的な印象ではあるが、上海の墓、墓地の変容の原因はまず、精神的・物質的原因・制度的原因の三つを挙げることができると指摘した。上海市の霊園や墓地に関する詳細な記載はいままでなかったが、本文の分類および上海市の墓、遺骨収納場所の変容・変化の分析は、今後大都市上海の、さらなる研究および比較研究の土台になる。

【キーワード】 現代、上海、葬儀、葬法、墓

1. はじめに

現代中国では、都市を総合的な経済の実力、都市規模、政治と経済的な影響力、および国際競争力等を基準に、「一線都市」(一線都市)、「二線都市」(二線都市)、「三線都市」(三線都市)と呼ぶことが流行っている。「一線都市」と呼ばれている都市は、中国に数多くある都市の中で四つしかない、「北・上・広・深」すなわち北京・上海・広州・深圳の四つの都市である。また、行政区画上に四つの直轄都市である北京・上海・天津・重慶が一線都市であるという見方もある。

筆者は、この中国で首都北京に次ぐ一線都市と呼ばれる上海という大都市において、遺体を埋葬

する慣習から火葬された遺骨を収納するまでの遺体・遺骨を収納する慣習の変化による墓の変遷を対象に、2005年以來調査を行い、「東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史」研究班のメンバーとして、下記の調査を実施した。

- (1) 2010年3月23日から3月29日に、上海市、浙江省温州市において、墓、霊園の変容について調査実施。
- (2) 2011年3月14日から3月21日に、広東省広州市およびその周辺地域の葬法の変遷について調査実施。
- (3) 2011年11月30日～12月9日 上海と北京において、墓に関する文献調査を実施。

本文は、土葬から火葬への変化による墓・墓地の変化をめぐり、上海市と周辺地域における実地調査および文献調査で得られる資料をまとめるものである⁽¹⁾。

まずは、文献資料によって上海の発展をデータで見えてみよう。

2. 上海市の概況

上海市は都市としての歴史は数百年ほどあり、港の町から次第に大都市になった。文献によると、秦の始皇帝が中国を統一した際（前221年）に統治する領域を36の郡に分けたときに、上海地域は会稽郡に属していたが、当時はまだ都市が形成されていなかった。紀元751年、唐王朝の天宝10年に上海は華亭県の管轄にあったという記載があるが、宋代（960-1279）に大きな船が「上海浦」に停泊した際の資料によると、上海は船の泊まり場、一つの埠頭から発展してきたとわかる。その後の1267年に、上海浦に「上海鎮」という町が設立された。元代の1292年に「上海県」が設立され、その後次第に都市としての発展が加速した。

1842年中国とイギリス間の『南京条約』により、上海は広州、寧波、福州と廈門と合わせて5つの通商港とされ、海外の船を受け入れる港となった。上海の人はこのことを「上海開港」という。上海開港により、海外の政治、経済、文化は多様な形で上海に進入し、上海は西洋文化と伝統文化との融合の場となり、次第に国内における交通運輸と金融および文化の中心都市となってきた。上海の都市人口は約1843年から1947年の約100年に20倍以上に増加したこと、行政的な区画も変動し、管理する土地総面積が10倍近くとなったデータの側面から、上海は数百年で一つの町から大都市へと飛躍したことがわかる。

人口面において、1843年から1949年までの統計があるが、数値は106年間に22倍以上に増えたことを示している。1843年は約20万、1853年約54万、1910年約129万、1915年は約201万、1930年は約314万、1947年は約449万、1949年は約546万になった。なお、最新データとして、昨年の2011年末の統計では戸籍人口は1,419万4,000人ということであり⁽²⁾、1949年以來の62年間でさらに二倍以上に増えたことは、都市の拡大ぶり、発展ぶりを語る一側面である。

もう一つのデータでは、1949年以後上海市の管轄面積と行政区画は、大きく変化したことを示している。1949年は636平方キロメートルであったのに対して、1958年、江蘇省に管轄されていた嘉定県、宝山区、松江県、金山県、川沙県、南彙県、奉賢県、青浦県、崇明県（島）、上海県等の10の県を上海市の管轄に移動したことによって、上海市が管轄する面積は5,910平方キロメートルに達し、9倍以上に拡大した⁽³⁾。

行政区画のデータとして、1949年に上海市は20の市街区と10の郊外区に区画された。その後、複数回の行政区画改定を行った。1988年から『上海市城市総体規劃（上海市都市全体企画）』に従い、合併や県を区に変えるなど一連の行政整理が行われた結果、2009年年末の統計では、17

の区、1つの県（109の鎮と2つの郷）が上海市の管轄下となっている⁽⁴⁾。現在、上海市は黄浦江を挟んで、二つの部分に分けられている。江の東岸を浦東と呼び、1990年代の開発計画を実施するまでは、漁村と田んぼの地であった。1992年に設立された新しい開発区である浦東区に対して、黄浦江西岸、俗に浦西と呼ばれる広い地域は伝統的な上海地区であり、一般に言う上海市である。

以上、一連のデータで上海の発展ぶりを示した。上海が江南地域の一つの町としての「鎮」から次第に「一線城市」の大都市へととなった過程において、人々の生活の面も伝統的なスタイルから現代都市の生活様式へと次第に変化してきた。以下は、この地域における伝統的な葬法の変化および現代化、都市化のプロセスにおける伝統観念の伝承を検証する。次章ではまず、伝統の葬法と墓地の様相を記述する。

3. 昔の葬儀・葬法

1) 葬儀の変化

他地域における漢族の死のしきたりに似て、死後3日間は死者を家に置いて、葬儀を行ってから出棺することは、1940年代までの葬儀のパターンである。遺族と親戚はその3日間で一連の死者を送り出す行為を完成する。

1960年代の半ばごろから始まった政治運動「文化大革命」期間中は、行政に決められる簡単な「追悼会」が唯一の葬儀方式であった。上海は1970年代に、完全に火葬に移ったため、死者は病院から「殯儀館」（葬儀場）に運ばれる。そこで「追悼会」よりさらに短時間で済む「告別儀式」（告別式）が、伝統的な葬儀に替わって行われる。

「告別儀式」（告別式）は、通常1時間か2時間で行う。参列者は一列になって、順番に遺体に向かってお辞儀をしてお別れを告げた後、遺族にもお辞儀して会場となっている部屋を出る。その後、死者は茶毘に付される。遺骨は火葬場にある保存スペースに預けるか自宅に持って帰る。四十九日の法事後、または1年、3年後に再び遺骨を故郷の墓地に埋葬する。これを「落葬」と言う。

2) 伝統的な葬法

上海地域は漢族の人数が圧倒的に多いため、北方の漢族と同じく、昔は人が死んだ場合、その遺体の処理法はほとんどが土葬法であった。しかし、北方漢族の土葬と違う点は、葬儀の後に柩を寺院に預ける、または野原か自分の家の田んぼに置かれ、数年後に「落葬」（埋葬）するやり方がかなり一般的に行われていた点であった。伝統的な葬法は具体的に3種に分けられる。直接土葬、数年間柩を埋めずに「停霊」してから埋葬、骨を拾って再度埋葬する、というものである。

（1）直接土葬

漢族の伝統的な葬法は土葬であり、上海地域でもよく見られる葬法である。上海地域では、直接土葬は2種類ある。一つは、裕福な家がすでに一族の墓地を持っている、あるいはすでに生前に墓を作っていた場合である。その場合は、葬儀の後は墓地へ柩を運び、そのまま埋葬する。もう一つは、貧しい階層の人々が葬儀後に柩を管理する財力がない場合で、簡単な葬儀をしたあとは、そのまま公共墓地に埋める事例が過去に多かった。

（2）「停霊」後に埋葬

北方地域ではほとんど直接土葬であるのに対して、上海地域では、しばらく柩を置いた後に埋め

る事例が多い。普陀区では、葬儀後は地表に柩を置き、その周囲を煉瓦、または稲わらで覆うやり方がかつてあった。煉瓦で囲む場合は「瓦坑」と呼び、稲わらで囲む場合は「草坑」と呼ばれる。

西郊外の青浦区では葬儀後は柩をすぐに埋葬しない「浮厝」する慣習があった。葬儀後に柩を一族の祠堂に置くか野原に置き、柩を草やわらで覆う事例は昔よくあったという。またこの地域は、埋葬することは「落葬」と言うが、清明節と冬至の日に行うことがほとんどである。なお、埋葬する前に、まず墓穴で麦わらを燃やして「暖める」慣習もあった。死者はこれからここに「住む」ので、住みやすいように部屋を暖めておく行為は、明らかに漢族伝統の他界観、靈魂観の表れである。

民俗誌の記載によると、1949年上海が共産党政権になった際に、多くの柩の保管場所である各区の「寄柩所」では、柩は管理不備のため露天に置かれ、破損が激しいものも多かった。衛生部門がそれらの柩を移転したり、埋める処分と火葬処分をした写真も殯葬博物館に展示されている。当時は死亡後すぐに埋葬しない習俗が一般的に存在することと、死後に柩ごと故郷へ運搬する慣習がかなり存在していたことが物語られる。

(3) 骨を拾って再埋葬

崇明島は、上海市が管轄する大きな島である。島には、特別の葬法が存在していた。「拾骨葬」という骨を拾って再葬する葬法である。死者を埋葬した翌年の冬至に、家族は一度掘り出して骨を骨甕に入れて、次の埋葬地へ持っていき、埋葬する。1960年代にまだ骨を拾って再葬する事例があったが、80年代以後、島に火葬が普及したことにより、「拾骨葬」は次第になくなっていったという。

漢族の人々は、「葉落帰根」と「入土為安」の伝統観念を代々伝え持っている。「葉落帰根」とは、老後や死後に故郷に帰ること、「入土為安」とは、死後に土の中に埋められて安らかになることであるが、二者とも漢族の伝統的な死亡観、あるいは死後の願望を表している語である。

故郷から遠く離れた地で死亡した場合、「葉落帰根」と「入土為安」を実現するために、柩を故郷へ運び、故郷で土葬するには多大な労力と財力が要る。個人の力で実現するのは難しいことである。そこで、上海市では地方から来る「外郷人」とよばれる人たちの葬儀や柩の一時保存および後日に故郷への柩の運搬などの手伝いと手配などを担当するのは、同じ地方出身者によって形成した同郷組織の「会館」や「公所」である。

4. 公墓の出現

一族専用の宗族墓地が漢族の伝統的な墓地のありかたであったが、都市が発展し、都市に出て農業以外の仕事に従事する人が増えるにつれて、出稼ぎ先で病気や事故などで死亡する人も現われてきた。財力がない人や何かの理由で死後に故郷に戻れない人たちは、この地に埋められるが、後に上海で仕事や商売で成功した人々も、故郷でなく、上海で墓地を造るようになった。次第に上海の繁華街から離れた郊外に一定規模の公用墓地が現われた。

1956年まで、私営公墓と個人墓地、家族霊園は数多くあったが、1956年から「公私合営⁽⁵⁾」され、1990年代までに私営の墓地はなくなった。下記は、かつて上海に存在していた大きな公墓の事例である。

「山東路公墓」——上海市で作られた最初の商業性公墓であった。上海開港につれて多くの外国人が上海に来て、生活し、仕事と商売をしていたので、外国人の死亡と死後処理が無視できない問題となった。

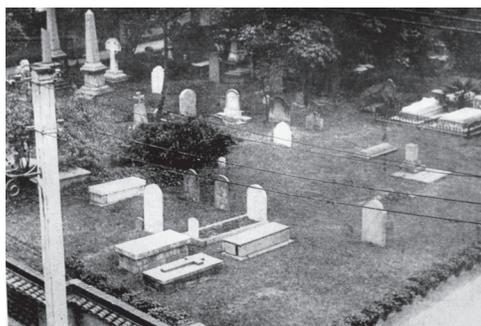
写真1 山東路公墓一角⁽⁶⁾

写真2 「宋慶齡霊園」と改名された「万国公墓」の正面

この「山東路公墓」は、上海開港翌年の1844年にイギリス人が最初に作った経営目的の公墓であった(写真1)。1868年にはスペースがいっぱいになったため、墓地の管理、維持を続けるものの、販売営業を停止すると宣言した。1951年に政府の行政区画整理が実施され、公墓内の遺骨を移転させた後、その跡地に体育館が作られたので、上海市における最初の公墓の姿はなくなった。

資料写真によると、公墓内の墓は石碑を立て、柩を収める長方形の箱状のものが多く見える。



写真3 宋慶齡と両親が埋葬されている墓

「万国公墓」(写真2)——「万国公墓」は、最初は「薤露園(ジュルユエン)」という名の私営墓地であった。浙江省出身の経潤山氏が土地を購入して1914年に立てた「薤露園」は、万国公墓の前身であった。彼の死後、薤露園の土地は隣の土地の所有者に侵食されたため、妻の汪氏は万国公墓現在地の土地を購入し、元の薤露園をここに移動した。国籍も民族も姓氏も関係なく、誰でも利用できるという意味で「薤露園万国公墓」と改名したという⁽⁷⁾。

この「万国公墓」は中国人が上海で造った最初の商業性公墓として有名であり、著名人の墓が数多くあることで知られている公墓である。1934年に国民党の上海市政府衛生局に管理権力を移し、万国公墓は私営公墓から公営公墓となった。

1984年に孫文の妻であった宋慶齡氏の遺骨がここに埋められたため、「宋慶齡霊園」と改名されたが、宋慶齡氏と両親の墓(写真3)と展示スペースの東西両側には「外国人墓区域」と「名人墓区域」が依然「万国公墓」の昔のように保留されている。

「聯誼山莊」——「聯誼山莊」は、同郷人共同墓地の性質を持つ公墓である。1924年に作られた広東商人林氏の個人墓地を、広東商人連合会は彼との交渉により「聯誼山莊」と名づけて、広東出身者専用の同郷人公墓に変えた。

公墓は公園式に作られ、水と緑に囲まれる閑静なところとなり、入場自由の公園にもなっていた。広い境内には、柩の保存場所、法事をする空間、位牌が置かれる空間と高価な分譲墓地などがあり、寺院と食堂まで作られた、当時では相当のサービス設備を整えた複合式の殯葬施設であった。その後、広東人以外の上海の裕福者や有名人もここに最後の地を求めるようになった。映画女優の阮玲玉の墓もここにある。

1950年代初期に上海市で有名な公墓とされ、当時は4万以上の柩が埋葬されていたという、か



写真4 柩型の水晶骨壺



写真5 家型の焼き物骨壺

なり大規模な公墓であった。しかし残念なことに、1960年代中期に始まった政治運動「文化大革命」により、墓は破壊されてしまい、その後再建されず、この公墓はなくなった。

5. 今日の墓地

2008年5月に「第三回国際殯葬設備用品博覧会」が上海市浦東区の浦東展覽館で開かれた。展示会場の入り口に各種の材料で作られた棺がずらりと並べられている様子は、一般の展示会では見られない風景である。火葬機械や墓地の盗難警報機、霊柩車など先進的な葬送関連の設備などが展示される一方、各種の材質で作られた棺や家形と本の形の納骨容器などの(写真4、5)かつて迷信とされた葬儀の民俗的慣習に関連する品物の数々の展示は、葬送民俗は一般的な葬送行為とそれに伴う必需品として認められ、葬送に関連する品物は商品として生産されて、都市の葬儀に消費されることを物語っている。

土地管理が厳しくなった今日の中国では、遺体や火葬後の遺骨をふるさとへ運んで帰っても、昔のように田んぼの隅に埋めることがほとんどできなくなっている。そのため、家族と共に都市で暮らす多くの地方出身者は、都市で死亡すると現地で火葬され、都市の霊園に遺骨を納める方法を選択するようになった。

宗族墓地は、漢族の伝統的な墓地の在り方であったが、一族の墓を風水の良い地に集中的に作る「宗族墓地」のかつての慣習は1950年代以後崩れた。以降は墓の使用単位は殆ど夫婦墓となっていた。土葬時代の土を盛り上げる「土饅頭」型の墓は、火葬の遺骨を埋葬することに従い、小さくなった。さらに、1990年代以後、上海市の霊園は外資系経営、または上海市の福祉部門から独立した企業⁽⁸⁾による経営に変化したため、霊園の区画が多様化し、さまざまなパターンの墓が現われてきた。

伝統観念の「入土為安」から発した地下に埋葬するという遺骨の収納が、一族の墓地の形が消え、墓地が皆公共霊園に変身した後でも依然中心的な遺骨収納法となっている。地下の空間に遺骨を「埋葬」し、地表に墓石を立てる墓は、どの霊園においてもよく売れているが、その価格は、都市の地価上昇、住居販売価格の上昇および建築材の価格上昇に伴って、どんどん騰がっている。現世の住居より値段が高く、死んだら葬儀代も高く、あの世の家も買えない「死不起」という言い方も中国の都市社会に流行している。

それも一因となり、環境保護、土地節約をテーマにした各種の土地節約型の「小型墓」や、土に埋めず立体式納骨塋や室内型の納骨式など遺骨の収納法が進められ、火葬墓の多様化が次第に目立

ってきた。親の遺骨の保存に対して過去の単純な「埋葬」法（むろん地下収納も埋葬に含まれる）にこだわる傾向から、多様な「収納」法に変化していることが、調査により指摘できる。

以下、上海地域の今日の墓は、多様な様相を呈することをここに指摘し、人々の死後の需要に応じた墓の変化を記述しておく。

調査により、上海市において現在の墓地のあり方は多様な様相を呈していることがわかった。上海市およびその郊外を含む、筆者が「上海と周辺地域」と表現する地域での墓調査はまだ不十分であるが、いままで入手した資料を手がかりして、下記のように大きく5種類のA類～E類にまとめられる。葬法からのA分類、墓の立地からのB分類、死者の集まり方のCと特別性の高いD特殊墓地とEの経済の角度からの分類と、各項目にさらに小さく分類があるように分け、Aには2分類、Bには3分類、Cには3分類、Dには2分類、Eには2分類にしている。

現代上海の墓の種類

A——葬法による分類

- (1) 土葬墓
- (2) 火葬墓

B——立地による分類

- (1) 室外・地中墓
- (2) 室外・地上墓（収納塀）
- (3) 室内墓

C——集まり方による分類

- (1) 夫婦墓
- (2) 小型家族墓（3人か4人）
- (3) 仲間墓地

軍隊同士・芸術者・文学者・子供を失った親同士・養老院の老人同士・ガン患者グループなど

D——特殊な墓地

- (1) 海葬者・献体者
- (2) 無縁仏

E——経済の角度から分類

- (1) 豪華型
- (2) 儉約型・エコ型

花壇葬・芝生葬・樹木葬・小型室外墓

A——葬法による分類

A分類の(1)土葬墓は、よく知られている漢族の伝統的な葬法による墓である。

(2)火葬墓は、遺体の埋葬が火葬により遺骨の埋葬になった墓である。一般的に土葬墓より浅く掘り、土饅頭も小さくなるのが特徴である。

B——立地による分類

B分類の(1)室外・地中墓は、A(1)土葬墓、A(2)火葬墓とも、立地の視点から一つの



写真6 室外・地中墓 (B-(1))



写真7 室外・地上墓 (収納塀) (B-(2))

類に入れている (写真6)。

B(2) 室外・地上墓 (収納塀) は、火葬後の遺骨収納である立体型の納骨塀を指すものである (写真7)。これに対して、B(3) 室内墓は、室内に遺骨収納するという、いままで漢族には存在しなかった「墓」の立地である。

「入土為安」の伝統に反して、遺骨を土に入れない室内墓は上海では意外に人気がある。その理由は、漢族の靈魂観や他界観から発する人情的な配慮を多く取り入れたことがあげられる。上海市の福寿園霊園は、上海市において二番目に納骨塔を建てる許可を受けた外資系の新型霊園である。納骨塔を単なる遺骨を置くだけの収納スペースにせず、部屋を工夫して特色がある室内墓として販売に成功した。この園では、旧式のロッカー収納遺骨と全然違う、生活感の溢れる空間を提供している。

今までの室外、または室内のロッカー式遺骨収納は、閉鎖的な石の板一枚で故人と遺族とを別々の世界に隔て、人が死んで他界に行ったというイメージが強かった (写真8参照)。これに対して新型は、「上下型」(写真9) か「前後型」(写真10) という遺骨を収納するスペースを作り、収納区間と祭祀空間が分けられている。二つの空間を前後、あるいは上下二段に分けて、まるで2Kの家のように、前後型では前の空間、上下型では下の空間に、故人の住居のミニリビングのようなガラス張りの空間を設けている。故人の生活空間を想像しながら、遺族たちは自分の思いも入れながら、さまざまに飾りつけをする。線香のような火の気のもの、傷みやすい花や生鮮食品以外なら、何を置いてもよいという。遺族はその「部屋」のカギを管理しているため、頻繁に訪れ、頻繁に手入れができる。その空間を作ることで故人と直接交流できる感覚が生じ、故人への思いを形にする心のケアや癒し効果もあると言われている。



写真8 室内墓の旧来式



写真9 室内墓 上下型



写真10 室内墓 前後型

C——集まり方による分類

Cの集まり方による分類の(1)夫婦墓は、行政に許される同じ墓、あるいは一つの墓の区画に入れられる人間の関係と数である。二人を入れられる墓には、友人や親子では入れられないのが決まりであった。

(2) 小型家族墓は、現在では可能になったが、これも一人っ子の子供が先に亡くなった両親への配慮から生まれた新しい形の墓であり、後述する「星星港」のすぐ後ろに区画した場所である。このような家族墓は、特殊な条件つきで作られるもので、一般的でないともてよい。

(3) 仲間墓地は、伝統的な血縁関係の一族の墓は一カ所に置かれる慣習に反して、ある集団のメンバーが死後、一つの区画に集中的に墓が置かれるものを指している。上海の霊園の中で、「IC林」、「星星港」と「新四軍墓地」は有名な仲間墓地である。

「IC林」——特殊な仲間墓地の一つには、福寿園の「上海市ガン回復クラブ」の会員に無料で「IC林墓地」を区画したことが挙げられる。同じガンの病気を抱える仲間と励まし合って楽しく生きた会員たちの、死後も仲間とずっと一緒にいたいという思いにこたえて、霊園が一つの区画を提供した。目立って墓石などはないが、一カ所に骨を置きたい、死後も一緒にいたいと仲間を恋しく思う気持ちの表れであろう。

「星星港」——もう一つの特殊な仲間墓地は、子供墓地である。上海の福寿園では、事故や病気で亡くなった子供の墓を一カ所に集中した上、子供への思いを表現できるよう、室内墓の納骨塔内に親たちが各々の子の記念品を展示できる一室「星星港」を提供した。子を失った親同士はともに墓参りや、展示室の手入れなどを通して次第にコミュニケーションをとり、一つのグループを形成した。このグループに入った親同志は、互いに慰め合って深い悲しみから立ち直り、徐々に他人の悲しみに目をむけるようになり、人と助け合う社会活動に参加するようになった。子供を集中して埋葬する墓地なので、墓石はかわいらしく彫刻され、墓の飾りや供えものに天真爛漫な雰囲気は漂う、霊園内で目立つ区画となっている。

D——特殊な墓地

D類の特殊な墓地は、(1) 海葬者・献体者のように、遺骨を土地に残さない人々を記念する、地表の「墓石」のみの「墓」である。(2) 長い年月墓参りされない無縁仏を一カ所に集中する「墓」は往々にして石に名前のみ記載される芝生葬となっている。

海葬者・献体者の「墓」——上海市が率先して行ったのは、土地を使わない「海葬」である。海葬は葬法ではなく、遺骨収納の一方法である。海葬は1991年から始まって、2008年3月まで、計114回、15,424名の水中散骨を実行した。共産党の指導者であった鄧小平氏も著名な文学者の巴金氏も海葬だったという。現在、指定海域での散骨は、政府より手当が出る。土地を使わない処理法は、今後の一方向として進められている。現在は、上海市民には歓迎されているようである。海葬された人々の名を「海葬記念碑」に刻み、墓参りの際に遺族は名前のあるところに小さな一輪の花を取り付ける(写真11)。これも、特殊な墓地の一つにみられる。

献体した者は、体はもう残っていないが、その人たちの顕彰として彼らの記念碑が作られて名前がこの世に残される(写真12)。その墓石には献体を象徴するように、男女の体のラインに沿った彫刻がほどこされ、体の部分が空白となっている。



写真 11 海葬紀念苑 (D-(1))



写真 12 献体者紀念碑 (D-(1))



写真 13 無縁仏の対応 (D-(2))

海葬および献体者の「墓」は、死後もこの世にかつての存在を表現したいという漢族の思いを語っている。

何らかの原因で何年も墓参りがなく、そのまま骨の収納地が放棄されているような墓への対応としては、その遺骨を一カ所に集めて名前を記録しておく（写真 13）。

E——経済の角度から分類

経済力から分類すれば、E（1）の豪華型とE（2）の儉約型も存在する。

有名人や、海外から帰国した華僑、政治家などの墓には、各種の彫刻やその人生を表すような石の造形芸術品が霊園で見られる。現在の中国社会の貧富の格差が話題になって、社会問題にもなっているが、それは墓の形や地表建築物などにも現れている。墓はこの世において個人の目に見える永遠の記念と思われ、人々はその地表における建築物に思いと財力を多く注いだ。

E（1）の豪華型は、裕福層が自分か親の墓を金銭を使ってつくった墓を指す。写真 14 は華僑という特殊身分で、唯一、上海の霊園で土葬が出来る高価な大型土葬墓である。写真 15 は火葬後の納骨であるが、墓石の材質および彫刻にこだわり、土地面積も広く使用するケースである。ここでは、芸術性を求めるケースが多く見られ、故人の個性が墓石に表現されている。写真 14 と 15 は、地方劇の名役者だった人の墓であり、その空間は舞台に見える。

調査中にかつてお世話になった上海市の著名な文人、文化研究者の姜彬先生の墓も発見し、多くの研究著書を世に残してくれた文化人の一生を表す墓石だなあと、しばらくは無言のままにその前に立っていた。芸術墓の一例としてここに挙げる（写真 16）。

（2）儉約型・エコ型

土地節約の芝生葬や樹木葬のような「収納法」では、芝生の真ん中に石が建てられ、お骨を芝生に撒き、その石碑に人々の名を書く。普通の公園の植木を思わせる花壇葬は、木の周辺にカラフルなブロック状の納骨スペースがあり、エコでユニークである。経済的に儉約志向で、現在提唱されているエコな「墓」には、花壇葬・芝生葬・樹木葬・小型室外墓などが挙げられる。ことばでは「～葬」というが、筆者はそのような場も「墓」とみなしている。

6. 結び 墓の調査から見たこと

不十分な調査ではあるが、上海地域の伝統文化が、飛躍的な都市化発展に従い大きく変化した中で、墓の類型を大体把握した。文献調査およびフィールドワークにより、上海地域の墓の種類を上記に記述したが、単純な土葬の土饅頭から、火葬の土饅頭など現代社会の需給に応じて、上記の



写真 14 E (1)-a 芸術墓 1



写真 15 E (1)-b 芸術墓 2

ように5つに分類された墓の種類は実に多種多様である。墓の変容・変化の原因は下記の三つ、「精神的・物質的・制度的」にまとめられる。

(1) 精神的

政治運動の連続および20年以上の経済改革が行われた1960～1970年以來、土葬法は火葬法に変わり、遺体の保全および遺体を必ず地下に埋葬する観念は緩まってきたように見られる。一族が集中的に居住する、共同生活・共同墓地のパターンが崩壊したことで、人々は夫婦二人で共同霊園に遺骨を収納することを受け入れた。

(2) 物質的

経済の発展により、石材の生産、加工企業が増えたことと、交通および遠距離運搬業の形成により、墓石の一般使用が可能となった。さらに、コンピューターの応用による彫刻技術の導入などにより、石の加工技術の可能性が拡大し、客の需要に応じて、大量供給あるいは特殊注文にも対応可能となった。

(3) 制度的

経済改革以來、富裕層より葬儀における高額な消費が認められるようになった。霊園では、客の要求に応じ、高級石材および高額の石彫刻などが提供できるようになっている。



写真 16 姜先生の墓

以上、上海の今日の墓の変遷と、現在の様相を文献資料、および実地調査でまとめてみた。その全容を把握し、物質文化を比較する角度から分析するまではいかなかったが、まず上海地域において、今後の比較研究のための基礎を構成する基本データ、基礎材料を把握することに努めた。墓のありさまおよび分類に関する本文の記述は、今後のさらなる研究と比較研究の土台になればと思っている。

注

- (1) 本文で使用する写真は、写真1以外は、すべて筆者が撮影したものである。写真1については、掲載の了承を編集者よりいただいた。
- (2) 上海市政府・人口と計画出産委員会公式HP「上海人口データ」 <http://rkjsw.sh.gov.cn/>
2012年5月21日公表
- (3) 2010年電子版『上海百科全書』p. 266 上海市政府公式HP www.shanghai.gov.cn
- (4) 2010年電子版『上海百科全書』p. 699 上海市政府公式HP www.shanghai.gov.cn
- (5) 1950年代に共産党政権が実施した、私営企業に対する「社会主義への改造」という政策であった。実質上ほとんどがその後、国営企業にされ、私営企業はなくなった。
- (6) 写真集『上海殯葬博物館』pp. 38 上海殯葬博物館編 内部刊行
- (7) 尹継佐 総主編 2008.10 『民俗上海 長寧巻』pp. 84 上海文化出版社
- (8) 何彬 2011「中国葬祭業の動向」、『民俗文化研究』11号 pp. 153-161

参考文献

尹継佐 総主編 2007～2010 『民俗上海』シリーズ 上海文化出版社
上海市政府公式HP <http://rkjsw.sh.gov.cn/> 2012年5月
『上海百科全書』（2010年電子版）上海市政府公式HP www.shanghai.gov.cn